

ほな、歴史通信

第97号

2020(令和2)12.1

社会の仕組みはどこまで変わる？

— 新型コロナ禍のなかで注視しておきたいこと —

新型コロナウイルスの感染が止まらない。ワクチンの開発等によって感染を収束させる見通しも立っていない。私たちは、まさにパンデミック(感染症の世界的大流行)の渦中にあると言つてよい。

それは、二〇一九年(令和元)十二月三十一日に中国・武漢市がウイルス性肺炎の相次ぐ発生を発表したことに端を発し、日本については翌二〇年一月十六日、厚生労働省が国内初の感染者の確認を発表したことが始まりである。その後新規感染者はじわじわと増え続け、とくに都市部での急増を受けて四月七日、首都圏など七都府県を対象に緊急事態宣言が発出され、同月十六日には宣言の対象区域は全国に広がった。「宣言」は、最終的に五月二十五日に全域解除されたが、決して鎮静化したわけではなく、三月末から五月に「第一波」、六月末から八月にかけて「第二波」と呼ばれる急増期を経たのち、一時は横ばいの状態にあった感染が十月以降は再び拡大傾向にある。本稿執筆時(十一月七日)でいうと、感染者は世界で四九三四万人余にも及び、日本で一〇万八三九六人を数えている。ちなみに、茨城県は八〇六人で全国一六番目の多さであり、大子町は県内で唯一感染者が確認されていない。

こうしたなか、感染防止のために三密(密閉、密集、密接)を避け、人との接触機会を極力減らすことが強く求められたことにより、日常の行動様式は大きく変わった。同時に、それは極めて重

大な影響となって現れた。例えば、四〜六月期の国内総生産(GDP)は年率換算で二七・八パーセント減に落ち込み、過去最悪のマイナス成長となったし、外国人の入国は原則拒否であったため訪日外国人客は激減し、今年上半年(一〜六月)の場合前年同期比七五パーセント減であった。影響は、大子町にももちろん及んだ。例えば、「百段階でひなまつり」等の観光イベントはほとんど中止となり、町が管理する袋田観瀑施設等五つの観光施設の総利用人数(四〜九月の間)は、前年に比べてほぼ半減している。

新型コロナの影響が深刻化するとともに、それに対応すべく多様な分野でさまざまな変化が生まれている。しかも社会や経済の新しい在り方につながると思われる変化が、である。感染症の専門家である高山義浩氏は、「今回の新型コロナウイルス感染症は、私たちの社会が過密になっており、感染症に脆弱であることを教えてくれた」(『コロナ後の世界を生きる―私たちの提言』、と指摘する。浮き彫りになった過度集中型社会システムの脆弱性をどう乗り越えるか、新型コロナ禍のなかで改めて大きな課題になっている。

それに関連して、これまでは見られなかった一つの変化に刮目したい。総務省の「住民基本台帳人口移動報告」によると、今年の五月、比較可能な二〇一三年七月以降で初めて、東京都からの転出者数が東京都への転入者数を上回る転出超過に変わった。その数は一〇六九人。六月には転入超過(一六六九人)に戻ったが、七月から再び二五二二人、八月四五一四人、九月三六三八人と、三か月連続の転出超過となった。こうした人口移動の背景としてコロナ禍による東京への移動抑制、テレワークの広がり、地方移住への関心の高まり等が指摘されている(九月九日付朝日新聞)。

「地方創生」策の展開にもかかわらず、人口の東京圏への一極集中は一向に止まなかった。先の変化は一過性のものなのか、あるいは一極集中から分散型社会へと社会の仕組みが変わり始める兆しなのか。今後の推移に注視したい所以である。(齋藤典生)

「縁を感じる大子町（下）」

赤地靖士

袋田の滝への遠足、貝沼スケート場でのスケートに続く三つ目のご縁は、平成九年（一九九七）七月、大子郵便局に局長として赴任したことです。前任者が郵便関係出身の局長だったこともあり、袋田の滝をモチーフにした地方版はがきを発行する段取りになっていました。その仕事の関係で出会ったのが、水墨画を独学で学び、県内外ですでに有名であった村山孝之画伯です。はがきの原画は紅葉時の袋田の滝で、カラーコピーですが一枚いただき、今も大切に保管しています。完成したはがきには、絵を囲んで「茨城県大子町 水と緑のロマンのまち 奥久慈やすらぎの里 だいがまち」と記され、関東管内で約四五〇万枚販売されました。大子町のPRに大いに貢献できたのではないかと思います。

そうした経緯もあって村山さんのお宅には何度か邪魔もし、アトリエも見せていただきました。大変な数の作品が広いアトリエに所狭しと置かれていて、私も書の道を志していましたので「こんなアトリエがあれば」と少し羨ましくも思ったものです。母屋のすぐ前には大きな楓の木があり、酷暑の時にはここで涼をとるとか。また、庭を隔てて田んぼが広がり、その縁を流れる小川の向こう岸は藪の丘になっていて「夏の夜は蛍が飛び交う自然豊かな所です」とも語っておられました。こうした環境があつてこそ数々の風情ある作品が生まれるのかと思うと、何か元気をもらつたような良い気分がしたものです。文房四宝（筆・紙・硯・硯）の話に花が咲いたこともよく覚えています。「この硯、星野岱石さんがつくった大子名産国寿石でね。この縁の彫り方が内側に食い込むように彫っているのが特徴かなあ」と村山さん。硯の話に花が咲いて、良い命の洗濯になりました。

平成十年一月一日、恒例の年賀の出発式には干支の兎の絵を画仙紙に描いていただきお客様ルームに展示しました。また四月二十日の通信記念日には一日局長をお願いしましたが、村山さんがお客様の目の前で花鳥等をスラスラとアツという間に描き上げたことが印象に残っています。その絵をプレゼントされたお客様は、「うわー、これいいの？」と声を上げ大喜びでした。

先にふれた国寿硯にも縁があります。ある日、職員の一人在「星野岱石さんが彫った硯を見てみますか」と言つて、数日後、新聞紙に包んだ硯を持ってきました。少し小振りですが良い硯です。一目で気に入ってしまい、退職記念にと思い購入しました。ところが後日、その職員は石の愛好家でつくる「石の会」（会長は星野岱石さん）の会員であつたため半値でいいですということになり、ちよつと得した気分になりました。その硯は今も愛用しています。私は物好きなせいか、その後、書の大作用にと縦二八センチ、横二四センチ位の大型の硯を星野さんに注文しました。届いた硯に少々傷があつたのでクレームをつけたところ、後から素晴らしい硯を持ってきたため結局二面購入することになりました。いずれも愛用していますが、良硯は見ているだけでも心が洗われます。一度星野さん宅に伺つた際、笑いながらこんなことをおっしゃっていました。「普通、はじくとキーンという金属音がするのが名硯だと言われますがね。この国寿石はポクポクと木製の音がする、これがいんですよ。石を採掘する場合、層によっても質が異なり、層が真平らな所の石でないといけない。あくまで均衡のとれた平らな層でないね。他にも湿気とかいろいろあるけど、これ以上は教えられないね」と。名人と称されるだけに気難しいと言うか、一刻なところもあるように思えました。

大子での仕事は僅か二年でしたが、村山さん、星野さんとお会い、お二人との交流のなかでさまざまな刺激を受けたことが何よりの思い出となっています。

（水戸市在住）

『太子地域の旧町村長事績集』を読んで思うこと

木村直幸

人口減少社会の到来により都市と地方の在り方が注目されるようになり、都市から地方への移住や地方創生といった言葉をよく耳にします。この移住や地方創生を考えるためには、自らの地域の発展過程に目を向け、先人が築き上げてきた地域の歴史に学び、これからの地域の在り方を考えることが重要ではないでしょうか。そうした折、明治二十二年（一八八九）の町村制施行から今日の地方自治体の基礎を形成した昭和三十年（一九五五）の町村合併までの六六年間を対象に、太子地域を構成した九町村の町村長一〇四名の事績をまとめた『太子地域の旧町村長事績集』が発刊されたことは、とても意義深いことと思います。

新たな行政村として動き出した明治二十年代の事績内容を見ると、どの町村長も産馬畜産組合や煙草生産同業組合の結成、区有林の植栽など、地域の特性を活かした農林業の振興に尽力されていたことがうかがえます。こうした多彩な取り組みが、今日の太子町の農林業の礎となり、形を変えて現代にも受け継がれていると思います。また、道路改良や教育振興への尽力も読み取れます。道路改良は地域間の往来を容易にし、産業発展の基礎となりました。教育振興では、校舎の建設等教育環境の整備に腐心しながらも、地域を担う人材の育成に注力しています。

明治後期から大正期を経て戦前・戦時下の昭和期に目を移すと、戦争の影響が色濃く見受けられる時期もありますが、地域発展のために鉄道誘致や道路改良がより具体的に進められ、農産物の流通等を中心とした経済的発展が見られます。特に注目すべき事績として、鉄道誘致を目的にした県議会や国会への請願、陳情等の積極的な政治活動が挙げられます。太子町長、保内郷地域の各村

長や町村会議員、代議士のみならず、福島県の代議士とも連携して強力な誘致活動が展開されています。鉄道建設の意義を浸透させ、その実現に向けた取り組みにはただならぬ努力が注がれたものと想像します。昭和九年十二月に水郡線は全線開通しましたが、これはまさに政治活動の賜であり、もし、この活動がなければ水郡線は実現されなかったのではないのでしょうか。

第二次大戦後の事績を見ると、戦後復興と保内郷九か町村の合併が最大の課題であったことが明らかです。町村合併は、「住民の福祉増進と共に地方自治を確立するために町村規模を適正化する」という国家的政策の下に進められたものですが、各町村長には将来の地域をどのようにすべきか、相当高度な想像力が求められたと推測されます。紆余曲折を経ながらも九町村という大規模な合併の必要性和地域の将来像を説き、合意形成に努めた各町村長たちのリーダーシップは特筆すべきものだと思います。

紙幅の都合上、各町村長の事績の詳細や地域での出来事は割愛しましたが、本書全体を通して、いつの時代の町村長も地元はもとより周辺町村、県、国等との関わりを意識し、広域的な視野をもつて地域振興に取り組んでいたという印象を強く受けました。今後、町村長の事績のみならず、それぞれの時代に住民がどのような活動をしていたのか、研究が進むことを期待します。

冒頭でふれましたが、現代は成熟した社会構造のもとで人口減少社会を迎えました。私たち若い世代は、地域を持続可能なものとするために何をすべきかという大きな課題に直面しています。この課題解決のために様々な施策が展開されていますが、『太子地域の旧町村長事績集』から読み取れる地域の特性を活かした農林業の振興や町村長たちの地域の将来を考えて尽力する姿から学び、これからの太子地域や県北地域、延いては日本の中山間地域の在り方を意欲的に模索して行くことが求められているのだと思います。次世代の保内郷地域のためにも。

（常陸大宮市在住）

戦国の世を偲ぶ荒蒔城趾と姫塚

飯村尋道

郷土史家の鈴木源陸翁から館の荒蒔城に「姫塚」のある話を聞いたのは、私がまだ学生の頃で五十年前も前のことである。

町付の古城（中城坪）に文明の頃（二四六九〜八六）、白河結城氏の家臣深谷氏の築いた獅子ヶ城があったが、天文十八年（二五四九）に佐竹氏方の那須郡馬頭の武茂氏の襲撃により、深谷伊豆守顕衡と嫡子重安（主馬四郎）が討死し獅子ヶ城は落城した。

初め佐竹氏は深谷氏亡き後の獅子ヶ城に家臣の荒蒔氏を入部させたが、永禄元龜（一五五八〜七二）の頃、荒蒔駿河守為秀・豊後



荒蒔城本丸跡の潰れた八幡様と石垣

守秀実兄弟に命じて、新たに獅子ヶ城に程近い要害堅固な山中に山城を築いた。これが館の荒蒔城で、慶長七年（一六〇二）の佐竹氏の秋田国替えで廃城となった。

私は町付の旧家である飯村家を訪ねては紀一翁から館の話を色々と聞かされた。

先祖が荒蒔駿河守為秀の客分となって当地に居住、水戸藩になつて藩主が度々訪れ、義公（光圀）が当家に逗留

した時の飯村宗雪の母は荒蒔豊後守秀実の女（娘）であるという。荒蒔城趾に行くには慈雲寺山門前の萩ノ反から館に登る。北西に尾根道をたどり堀切（空濠）を二つ越え、高さ一〇メートル程の小高い土塁を這い上がると荒蒔城の本丸跡である。そこには、朽ちてひっくり返った四尺程の木祠と潰れた石祠がある。私が学生の頃、紀一翁から聞いた佐竹氏の守り神「八幡様」である。朽ちた木祠には「昭和三年十月十一日吉辰」の棟札が一枚あり、また傍らの潰れた石祠の欠片には「享保三年戊戌九月十五日、施主」の刻銘が遺されている。

享保三年（一七二八）、白い凝灰岩質の祠がよくも三百年の風雪に耐えられたと思う。

本丸跡の八幡様は、飯村和紀氏によれば「昔から八軒で春秋二



「姫塚」か、西側断崖上の二基の土饅頭

回のお祭りをしてきたが、後には一回となり、今は解散してやっていない。ウチは客分だったのでここ上町に住んでいるが、何層もの段々になった城跡は城郭や殿様、家来の屋敷跡なのだろう。石垣もそのままだし潰れた石の祠は荒蒔さんの頃からあったのだろう」という。鬱蒼とした杉木立の中の星霜四百五十年にわたる腐葉土を剥がすと、積み石がゴロゴロとある。

北側は狭い尾根に掘られた空濠、西側は八溝川の断崖絶壁、東南側は深い谷底

というまさに難攻不落の天然の要害である。

さて「姫塚」について鈴木源陸翁から「荒蒔駿河守為秀には男子なく女（娘）二人あつて養子を貰つたが、その養子が佐竹義昭に従い、永禄三年（一五六〇）、結城晴綱との陸奥白川の合戦で討死にした。女（娘）は悲しみの余り自害し、その葬られたのが姫塚で塚の高さは六尺あった」と教えられた。

以前、池田の荒蒔忍氏から位牌の鑑定を依頼された。チョウナ削りの位牌は真つ黒に煤けていて、「當寺開基高德有林大居士、神儀」と刻銘がある。

それに女（娘）二人の長女の養子は「陸奥白川一戦之刻、先養ハ討死」し、「下野那須ノ淨法寺中務太夫ニ嫁シ」た次女夫妻の「媒妁ヲ以テ堅田八郎義隆ノ孫資隆ノ八男小口次郎義勝ヲ再ビ荒蒔ノ養子ト爲シ越前守ト号」し、跡目を継がせたとの文言があり、文末に「水戸家士黒沢之住飯村氏宗英之ヲ補シ嗚呼荒蒔之裔孫、往昔ノ家名ヲ探リ一助ノ守ト成ス」（原漢文）と刻まれてあつた。

因みに「高德有林大居士」は荒蒔駿河守の戒名である。

位牌にある飯村宗英は延享四年（一七四七）の歿、初め宗茂と称したが、水戸義公が元禄八年（一六九五）夏に飯村家を訪れた時に「英」の字を賜り宗英と改めている。

この位牌の銘を勒した者は荒蒔城主の外裔孫の飯村宗英である。位牌には養子の討死はあるが姫塚の記載はない。

以前、地元の飯村谷衛門氏からも「館の山のステンペンで秋田へ国ゲエするのがやで、お姫様が自害した姫塚があると昔から言われている」と聞いたが、その姫塚の場所が定かでない。

荒蒔城趾の西側の先端、八溝川の断崖上に塚らしい土饅頭が二つある。二基とも直径五メートル、高さ二メートル程で、塚には雑木が繁茂している。もしやこれが姫塚か。

姫塚については荒蒔駿河守が開基した高德寺の境内にあるとの説もあり、住職の奥様に確認したが「姫塚？知らない。先住から

も聞いていない」という。

奥様に案内されて荒蒔駿河守為秀の墓塔を見たが城主に似つかわぬ質素な石塔で上部は欠けていた。

姫塚が城主荒蒔氏の菩提寺である高德寺にないとすれば、巷説通り館の城趾にあるのか。となると鈴木源陸翁から聞いた「姫塚の高さは六尺」が、例の断崖上の土饅頭の高さと一致する。残り一基の土饅頭はお姫様の道連れとなった乳母の塚でもあるのか。嗚呼、荒蒔城と姫塚、何とロマンと謎を秘めた古城趾であろう。

（常陸陸大宮市在住）



荒蒔一族の墓（後方左端が荒蒔駿河守為秀の墓塔）

大子自動車株式会社の軌跡（後）

大金祐介

前編（本誌第九五号）では、大子自動車株式会社の創業について取り上げたが、後編では法人化とその後について紹介したい。

外池太一郎らの乗合自動車業は、大正八年（一九一九）五月に個人事業として開業したが、業績が好調だったことから、開業二年後の大正十年に大子自動車株式会社として法人化されることになった。資本金は五万円で、一千株の株式は七月末までに公募を待つことなく有志者の間で全株引き受けとなった。株主は、総勢一六名で、ほぼ全員が大子町在住の商人だった。八月二十七日には、創立総会が開催され、役員が選出された。役員は、取締役社長が外池太一郎、専務取締役が菊池信太郎、取締役が川口利吉、監査



大子自動車株式会社（藤田隆彦氏提供）

役が松浦栄次郎、益子有造という顔ぶれだった。そして、十月三十一日、大子町金町に置かれた社屋の二階で開業式が挙行された。出席者は、会社関係者のほか、益子彦五郎大子町長、田口造酒太郎太田警察署大子分署長をはじめ、官公署長、学校長、町区会議員など、百余名に及んだ。その後、十二所神社境内で祝賀会が開催された。手踊りや花火などの余興が披露され、記念品が配布されるなど、盛大な祝賀会だった。

大子自動車は、引き続き大子大宮間で乗合自動車を運行した。法人化後は、大子大宮間を自動車四台で一日三往復し、うち一回は水戸まで運行することを計画していたという。大正十一年十二月十日に山方宿駅が開業すると、路線を大子大宮間から大子山方間に変更し、山方で鉄道と連絡した。さらに、大正十四年五月十五日からは、大子山方間を一日四往復に増便した。これにより、日帰りで太田や水戸に行くことが可能になった。それまで宿泊を余儀なくされていたことを考えると、日帰りが可能になったことは革命的な出来事だったと言えるだろう。

大正十四年八月十五日に上小川駅が、昭和二年三月十日に常陸大子駅が開業すると、それまで好調だった大子自動車の業績が一転して悪化した。大子自動車は、大子と最寄りの鉄道駅とを結んでいたが、大子から鉄道を利用できるようになったことで、その必要性が失われたのである。路線を山方方面から他の方面へ切り替えたものの、業績の改善には至らなかった。そして、時期は明確でないものの、昭和十年までに、営業免許や自動車等の設備を同業者や退職者に譲渡し、その幕を閉じたのであった。退職者の中には新たに乗合自動車業を開業した者もいたようである。

（大子町大子在住）

大子自動車株式会社 株主一覧

株数	氏名
250	川口 利吉
200	外池太一郎
150	松浦栄次郎
110	小崎 儀平
70	益子 有造
60	菊池信太郎
30	石井栄次郎
30	野内 得二
20	金沢 勇造
20	大金 弥一
10	小林 末吉
10	内藤七次郎
10	植田 秀吉
10	西田 金七
10	大金 喜平
10	横山 栄寿

大子町役場『銀行其他株券所有者調』より作成

内大野十二所神社の棟札と城館について

五十嵐雄大

大子町の寺社には、中世棟札が数多く残されています。棟札は、建築物の建築や修築を記念・記録するため、梁などの建物内部の高所に取り付けた木札のことです。棟札には、大檀(旦那)である大名や領主の名前とともに、武士や鍛冶・農民などの名前が残っていることがあります。そのため、中世の様相を知るうえで、重要な史料となるのです。

大子町内大野にある十二所神社には、七枚の中世棟札が伝わり、そのうち六枚が現存しています。最古の棟札には、文明四年(一四七二)とあります。文明年間の棟札は、数が非常に少なく貴重な史料です。ここには、大旦那として、「源越前守義種・源掃部助清貞」とあります。この両名は、佐竹一族の可能性が高いのですが、系図に該当する人物が見当たりません。また、年号不明の十一月二十一日付白川修理大夫宛「佐竹義憲書状」(遠藤白川文書二二四)に、大野城を落とし、城主を打ち取ったことが記されています。他の史料と照らし合わせると、享徳(一四五二年頃)の頃と推定されます。文書中の大野城は、内大野要害と考えられます。源義種や清貞は、打ち取られた城主の係累にあたる可能性があります。

その次に古いのは延徳四年(二四九二)の棟札です。延徳年間の棟札は、調査した限り県内ではここにしかなく、かなり貴重な史料です。ここには、「旦那蔵助守胤」という人物が出てきます。佐竹家臣の前沢氏の系図を見ると、守胤という名前が出てきます。前沢氏は後に小生瀬近くの利員城(常陸太田市利員町)の城主になっていることから、二人は同一人物ではないでしょうか。

三番目に古いのは、大永五年(二五二五)の棟札です。ここには、大旦那として「白土右馬助高真」とあり、取持に「斎藤隼人佐守

重」とあります。白土氏は小里城(常陸太田市小妻)の城主との伝承が残ります。また、取持(仲介)を行った「斎藤隼人佐守重」は延徳四年棟札の守胤の通字「守」を受け継いでいることから何らかの繋がりがあったと思われます。斎藤氏は内大野館の城主伝承があることから、この頃までに館が造られたものと思います。天文十二年(二五四三)には、堀之内に実相院が造営されました。この寺院は、東金砂神社の別当東清寺と深い関係があり、その頃には、斎藤氏は佐竹氏に属する領主になっていたものと推定されます。

四番目に古いのは、天文十九年(二五五〇)の棟札です。この棟札には、「大旦那源朝臣義頭 取持斎藤守重日向守」とあります。この時期は、佐竹義昭が当主になった頃と推定されます。佐竹氏が山入の乱・部垂の乱を克服し、戦国大名として勢力を各地に伸ばし、保内(大子)地域は、佐竹氏の安定支配下になりました。取持を行った斎藤氏は、大旦那になる佐竹義昭の名前をよく知らず、「義頭」と書いてしまったものと思われます。その後、天正八年(二五八〇)には、斎藤豊後守兼守が造営に関わっています。この史料だけは現存せず、「水府志料」の記録から内容を知ることができます。天正十一年の棟札には、斎藤豊後守忠守が大旦那として造営に携わっています。天正年間には斎藤氏は大旦那になる程の領主になったと推定されます。

中世で一番新しいものは慶長五年(二六〇〇)の棟札です。大旦那を和田安房守(昭為)が務めております。和田昭為は佐竹義重・義宣の最側近で、前年には甲神社常陸大宮市の造営にも携わっています。和田昭為は小生瀬の領主石井氏と縁戚関係があり、その影響で大旦那になったと思われます。

十二所神社では、どの時代にも村の住人が小旦那などとして神社の造営に携わっています。これは、地域の神社に領主や武士・住民が一体となって関わっていたことを示しています。

(茨城城郭研究会)

岩城氏の太子統治

太子城にまつわる伝承の中に、次のような記載が見られます。

芳賀河内守始テ築ケリ、何地ノ頃ニヤ白川氏ニ并セラレ久シク白河氏ニ属セリト云、後石城ニ并セラレ嗣ヲ絶ト云、夫ヨリ石城氏家臣ヲシテ守ラシムルコト四十余年ニシテ佐竹氏ニ并セラレ城遂ニ廃セリトナリ（「常陸国北郡里程間数之記」）

芳賀河内守が築いた太子城が、白川氏による支配の時期を経て、石城（岩城）氏によって、四〇余年の間守られていたという伝承です。中世の太子地域（依上保）は、白川氏に代わって、佐竹氏が治めるようになったというイメージが伝わっていますが、実は岩城氏が統治していた時期があったのです。

岩城氏による侵攻の時期は、白川氏側の史料からわかります。大永三年（一五三三）の閏三月に、白川義綱から子の晴綱に出された書状に「保内（依上保）に、（岩城）由隆が出馬するということ（白川氏側に対し）一つ一つ懇切にご相談いただいた旨、聞き及んでいます。」（「仙台結城文書」）と記されています。ここから、岩城氏が大永三年の閏三月頃に、白川氏と相談の上で依上保に進出したことがわかります。

こうして太子地域に入ってきた岩城氏ですが、その痕跡が太子町内に残る史料から確認されます。岩城由隆の子の政隆が、下野宮近津神社に対して、「近津神社の社人が、以前からの通り、諸事を申し付ける事はもつともなことです。それに対して色々と言う者がいるのは口惜しいことです。又、道理に外れたことは行わないでください」（「近津文書」）という書状を出しています。「以前からの通り」という表現から、昔からの近津神社の権利を認め、そ

れを保護するという立場を見せようとしたことがわかります。依上保に侵入した岩城氏にとって、保内惣鎮守の近津神社を保護することは重要だったようです。また、同じ近津神社に、「依上保内のことが、ことごとく満足いくものとなりますように」（「近津文書」）と岩城政隆が願いをかける願文も残っています。

また、内大野にある十二所神社の大永五年（二五二五）の棟札に、「大旦那平朝臣白土右馬助高貞」と、十二所神社の遷宮に関わった中心人物として、岩城氏家臣の白土高貞の名前が見えます。これはまさに岩城氏の依上保侵攻から二年後のことで、岩城氏の支配が地域レベルにまで浸透していったことがわかります。

こうした岩城氏の依上保統治がいつまで続いたのかは具体的にわかりませんが、天文五年（一五三六）頃に、佐竹氏が依上保まで進出した痕跡が見られることから、その統治は伝承中の四〇年と違い、十年程度のものではあったようです。

太子城にまつわる伝承には、この岩城氏による統治の時期の記憶が刻まれているのです。（藤井達也）

編集 太子町歴史資料調査研究会

齋藤 典生（太子町歴史資料調査研究員）

井上 和司（太子町歴史資料調査研究員）

藤井 達也（太子町歴史資料調査研究員）

藤田 貴則（太子町教育委員会事務局）

神長 敏（太子町教育委員会事務局）

発行 太子町教育委員会

太子町中央公民館内

久慈郡太子町大字池田二六六九番地

☎ 0295（72） 1148

発行日 令和二年（二〇二〇）二月一日